

鯨瓦

「しゃち」もしくは「しゃちほこ」と呼ばれる生物は、虎の頭と魚の体を持つ神話上の生き物である。鯨は、海から水を吸い上げて城の火に浴びせると、火災から守ってくれるという言い伝えがある。そのためか、城の屋根には鯨をかたどった棟瓦がよく置かれるようになった。

これは古代の宮廷や寺院にあった翼や動物の尾をかたどった瓦が発展したものであろう。鯨は、神社の狛犬と同じように、雌雄一対で登場することが多い。雄の開いた口と雌の閉じた口は、「オ」と「ン」の音を表していると言われている。この二つの音は、万物の始まりと終わりを意味し、仏教やその他のインド宗教において深い意味を持っている。

ここに展示されている鯨瓦は、1950年代の大天守の修理の際に、屋根から取り外されたものである。高さ127cmの雄は棟の南端に、124cmの雌は北端に置かれていた。瓦を支える2本の木柱に刻まれた銘文から、この鯨は1843年に作られたものと思われる。